

内視鏡・腹腔鏡合同手術（LECS）により切除を行った早期胃癌の1例

千葉 丈広, 比企 直樹, 布部 創也, 小菅 敏幸, 橋本 佳和, 入野 誠之, 清川 貴志, 田中友里, 本多 通孝, 谷村 慎哉, 佐野 武, 山口 俊晴

がん研有明病院 消化器センター 胃外科

【はじめに】Laparoscopy Endoscopy Cooperative Surgery (LECS) の手技は、適切な断端の確保と過剰な胃壁切除による変形を予防し、術後機能障害を軽減することを目的としており、われわれは胃粘膜下腫瘍に対して行ってきた。今回、LECS の手技を用いて胃癌に対して手術を施行した 1 例について、手技の工夫を加えて報告する。【症例】60 歳代の男性。前庭部大彎の 2cm 大の 0-IIc (中分化型管状腺癌) 病変に対して、前医で ESD が施行されたが、強固な UL3 以上の潰瘍瘢痕により周囲切開のみで断念され、当院紹介。LECS の手技を用いて ESD による人工潰瘍の部分も含めて全層切除・摘出した。病理組織学的所見では ESD による炎症・肉芽組織を伴う深達度 m, 大きさ 2cm の高分化型管状腺癌であった。【考察】胃癌の局所切除を行う際、われわれは病変を内視鏡牽引によって胃内に引き込み経口的に回収することで、腫瘍の腹腔内露出や胃内容の腹腔内散布による播種を防止することが可能と考えられた。【結語】ESD 困難な早期胃癌に対して LECS の手技を用いて切除を行った 1 例を報告した。